

西大路土居遺跡

発掘調査概要報告書



1992

鳥取市教育委員会
鳥取市遺跡調査団

にし　おお　ろ　ど　い
西大路土居遺跡
発掘調査概要報告書

1992

鳥取市教育委員会
鳥取市遺跡調査団

例　言

1. 本書は、鳥取市教育委員会の指導・監督のもと、平成3年度に鳥取市遺跡調査団が実施した、国道29号線津ノ井バイパス建設工事に伴う西大路土居遺跡の発掘調査概要報告書である。
2. 調査を実施した遺跡は、鳥取市西大路字上居ほかに所在する。
3. 本書における遺構の略記号として、S I : 橫穴住居跡、S B : 樹立柱建物跡、S K : 土坑、S D : 溝状遺構、P : 柱穴状ピットをもちいた。なお今回示した遺構名は仮称である。
4. 本書に使用した方位は遺跡周辺分布図を除いて磁北である。
5. 平成3年度の調査成果については、将来的に詳報を刊行する予定である。
6. 発掘調査によって得られた記録類および出土した遺物は、鳥取市教育委員会に保管されている。
7. 本書の作成は、鳥取市遺跡調査団が行った。

はじめに

西大路土居遺跡は、千代川右岸鳥取平野南東部にそびえる独立丘陵、大路山の北西山裾に位置します。遺跡の北側は大路川が流れ南西側は広大な水田地帯が広がっています。現在、右岸鳥取平野の中央部には、馬場、数津、大路山の山裾には東大路、中大路、西大路と各集落が営まれていますが、古代の右岸鳥取平野では大規模な集落遺跡が確認されておらず、大路山周縁などの微高地に小規模な遺物散布地が認められる程度でした。その中でも西大路土居遺跡は遺物散布地として昭和63年度の踏査により比較的新しく確認された遺跡です。

今回の発掘調査は国道29号線津ノ井バイパス建設工事に伴うもので、平成元年度に行われた試掘調査の結果をもとに、西大路橋へと続く市道東側の大路山の北西山裾1800m²が対象となりました。

調査の結果、弥生時代後期から奈良・平安時代にかけての20棟余りの住居跡、多数の土坑や柱穴状ビットなどが検出され、ほぼ連續的に集落が営まれた地域であったことがわかりました。また、多くの土器や石製品、鉄製品、玉類、銅剣、鉛滓などが出土しており、古代の鳥取平野を考える上で多くの成果を得ることができました。



上空から見た西大路土居遺跡（大路山の手前左側が調査地、北西から）

位置と環境

西大路土居遺跡は、千代川によって形成された沖積平野である鳥取平野の右岸南東部にそびえる独立丘陵、標高 105m の大路山の北西側山裾に位置します。遺跡の北側には鳥取平野南東部の丘陵、越路谷を源とし、大路山の東裾をまわり千代川へとそそぐ大路川が流れ、南西側は広大な水田地帯がひろがっています。平野の南部は現在でものどかな田園風景が見られる一方、大路川より北部は市街地から波及する開発により、景観が一変しようとしている地域もあります。

千代川右岸の鳥取平野においてもっとも古い時期の遺跡としては、本遺跡から南へ 2km 離れた縄文時代晚期前半の大路川遺跡があり、弥生時代になると、中期～古墳時代まで断続的に営まれ掘立柱建物跡を検出した久木・古郡家遺跡、後期の掘立柱建物跡を検出した六部山遺跡、後期後半の竪穴住居跡を検出した生山大池遺跡が知られています。墳墓遺跡としては後期後半の紙子谷遺跡門上谷地区、また越路の果樹園から外縁鉢 2 式の流水文銅鐸が出土しています。古墳時代に入ると、鳥取平野南部丘陵に大小様々な古墳が築造され、大路山にも 20 基余りが確認されています。集落遺跡は弥生時代から繼續して営まれる前期の遺跡や小規模な遺物散布地が確認されるにとどまり大規模な集落遺跡は現在のところ確認されていません。歴史時代に入ると、宮長竹ヶ鼻遺跡をはじめ、本遺跡から東へ 2km の地に因幡国守・国分寺が設けられるようになります。



調査前風景（南西から）



1. 西大路土居遺跡
2. 大崩山遺跡
3. 桥本遺跡
4. 伊勢谷遺跡
5. 久木・古都郡遺跡
6. 大崩川遺跡
7. 六郎山遺跡
8. 宮長竹ヶ鼻遺跡
9. 生山大泊遺跡松ヶ谷地区
10. 津ノ井字弥池遺跡
11. 因幡園分寺跡
12. 秋里遺跡
13. 岩吉遺跡
14. 古海遺跡
15. 山ヶ鼻遺跡
16. 茅蒲原寺跡
17. 服部遺跡

一例

● 聚落遺跡地
○ 古墳密集地域
▲ 上委古墳

西大路土居遺跡周辺主要遺跡分布図



遺構検出作業



柱穴半截掘り下げ作業



土器検出作業

調査の経過

発掘調査は、平成3年7月から始まりました。平成元年度に行われた試掘調査の結果をもとに、遺物を全く含まない表上下約20cmまでを重機によって掘り下げる、以下は全て人力によって掘り進めました。また、大路山からの雨水の下がりが顕著なため、市道南側の調査区低地に排水用の水路を設けることになりました。さらに、調査区を10m×10mの方眼になるように北からA-E区、西から1-8区に区分し、それぞれ南東端の杭名をとってA4-G、D6-Gなどの区名称として測量および遺構外で出土した遺物の取り上げの基準としました。

こうして調査は調査区南側の微高地から北側の平坦地へと順次進めました。まず、南側で弥生時代後期後半の断面袋状の貯蔵穴が検出され、すぐ北側に同時代の平面形が多角形の整穴住居跡S1-01、そのS1-01と西側を切り合う状態でS1-03、さらにS1-01の北側に古墳時代中期後半の平面方形のS1-17、そのS1-17の北東側を切り合って奈良-平安時代の平面方形のS1-04-09が次々と検出されました。また、S1-01・03自体も数度の建て替えが確認できました。また、傾斜地からはこのほかにも数株の整穴住居跡が検出され、いずれも斜面に立地して

いたことから切り合う住居以外北側半分の壁面や側溝は流失していました。

調査区北側の標高7m前後の平坦地では、古墳時代中期末～後期の堅穴住居跡をはじめ掘立柱建物跡、土器埋め状土坑、土器群が検出され、また調査区全体から無数の土坑、柱穴状ピットが検出されました。

これらの遺構および遺構外からは、数多くの遺物が出土しており、主なものを挙げると、弥生時代前期～古墳時代～奈良・平安時代の土器、石庖丁、石鍬、砥石、石鎌などの石製品、鉄鎌などの鉄製品、ガラスや滑石製の小玉、碧玉製の管玉や玉未製品、有孔円板、鉛錠、ふいご片などがあります。また、中でも銅劍は県内で2例目であり、発掘調査で出土したとなると初の例となります。大変貴重な資料であることから、今後の検討が期待されています。

こうして次々と明らかになった遺構や遺物については、随時写真撮影や実測図をとり、正確に記録しました。取り上げた遺物は丁寧に水洗いをして出土位置や取り上げ日を注記し、接合・復元作業を行っています。

このように、調査は外作業と室内作業を並行して行ない、平成4年3月まで実施しました。



遺物出土状況実測作業



土器水洗い作業



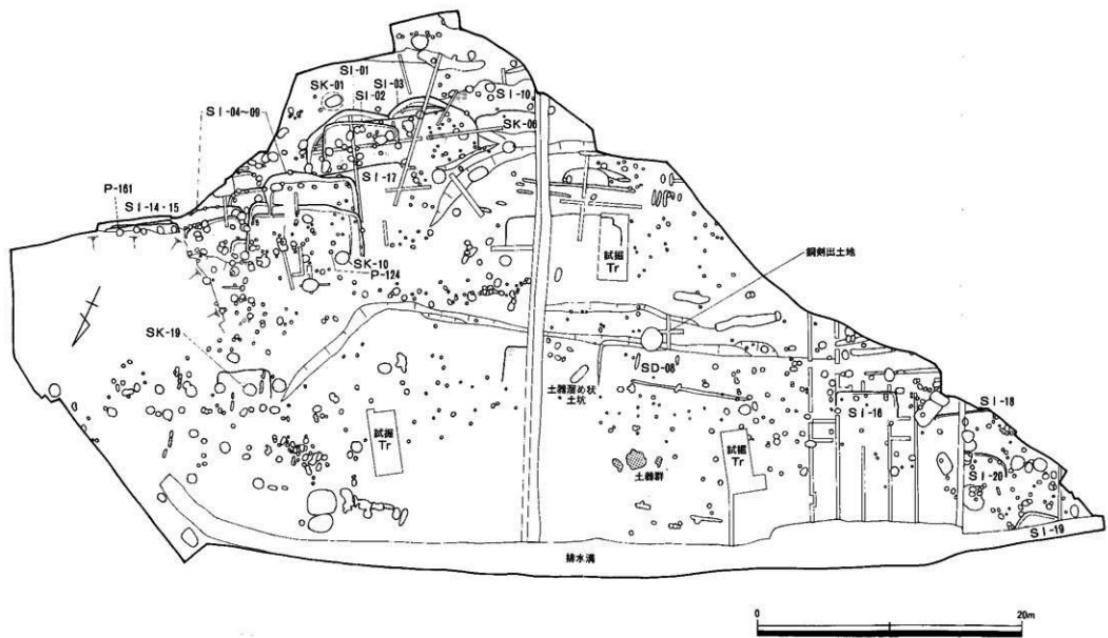
写真整理作業

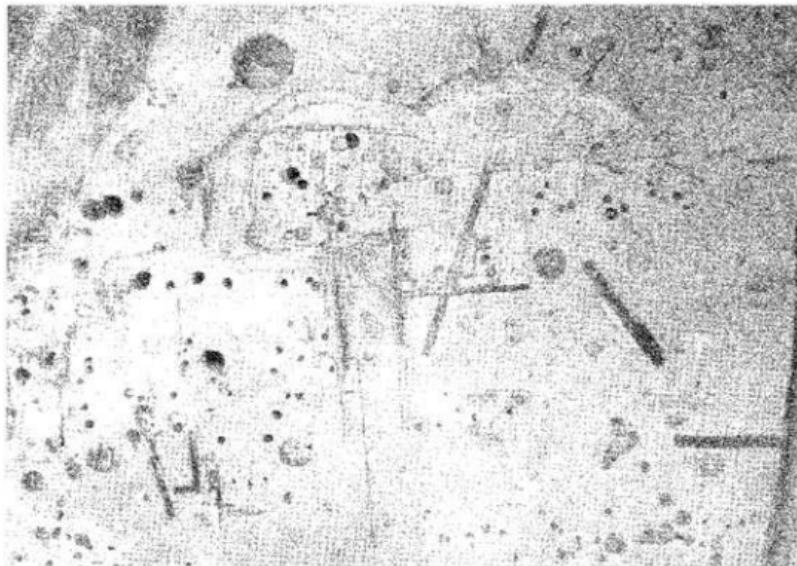


調査地全景（北西上空から）

検出した遺構

調査の結果、竪穴住居跡21棟、掘立柱建物跡3棟、袋状貯蔵穴1基、土坑56基、土器溜め状土坑および土器群、その他多数の柱穴状ピットを検出しました。特に調査区南東部の斜面では、弥生時代後期後半、古墳時代中期後半、奈良・平安時代の竪穴住居跡が切り合う状態で検出され、弥生時代後期後半の竪穴住居跡S I-01・03は数度の建て替えが認められました。調査区北側の標高7m前後の平壠地では、古墳時代中期末～後期の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土器溜め状土坑、土器群、また、部分的に中世のものと考えられる遺物を出土する柱穴状ピットが検出されました。さらに調査区全体で、土坑や柱穴状ピットが多数検出されています。若干空白の時期がみられるものの、大路山の裾部では集落が盛んに営まれた地域であると言えるでしょう。また、調査の過程で掘った試掘トレーンチから弥生時代前期末～中期初頭の土器がまとめて出土しており、下層にはさらに古い時期の遺構の存在が考えられます。





SI-01-07, 17検出状況(北西上空から)

調査区南東部の斜面高位には、弥生時代後期後半から奈良・平安時代の竪穴住居跡が10余棟も切り合って検出されています。斜面に立地しているため、いずれも北側の壁面は流失しています。このうち弥生時代後期の竪穴住居跡SI-01・03はそれぞれ間をわずかに数度の建て替えが行われており、SI-01は平面形が多角形なのに比べ下層のSI-02は方形の平面形をしています。どちらも黄褐色ローム上で貼床をしており、特にSI-02は焼土が4ヶ所にわたり認められました。また、SI-01～03からは多くの上器と石製品が出土していますが、土器の中には在地の土器とは形態が異なり、叩き目が底面まで顕著にみられる甕が少なくとも10個体以上は出土しています。



SI-01 貼床状況（西から）



SK-10 遺物出土状況（南東から）



SK-10 遺物出土状況（北西から）



SK-01（南から）



SK-10（北西から）

S I-03の西側に位置するS I-10は北側の壁は失っていましたが、弥生時代後期後半の土器と一緒に鉄滓と思われる塊を出土しています。

調査区北側の平坦地では、土器が集中して出土する地点が数ヶ所あり、土層断面で確認したところそのうち一つは土器溜め状の土坑であることが判明しました。

検出された遺構の中には大小様々な土坑があります。多くは平面形や橢円もしくは円形で埋土から数点の土器片が出土するといった例がほとんどですが中には若干様相の異なる土坑もみられます。

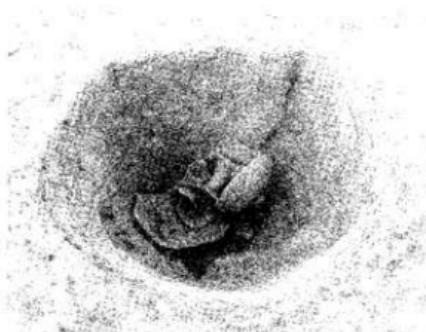
竪穴住居跡S I-01のすぐ東側で検出された土坑S K-01は、断面袋状であることからS I-01もしくは02の貯蔵穴と考えられます。S I-05の北側のS K-10は平面が椭円形で多くの角礫・円礫を出土しています。



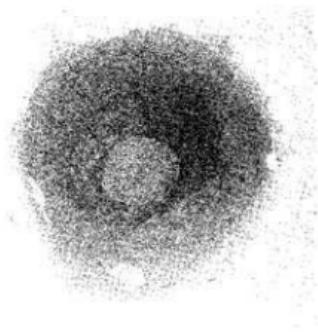
土器埋め状土坑検出状況（南東から）

その他の遺構としては、孤立柱建物跡、柱穴状ビットがあります。

掘立柱建物跡は、調査地北側の平坦地で検出されており、特に調査区西側に集中して認められます。いずれも主軸がN-56°-E前後をとります。出土した層位から、古墳時代中期～後期と考えられます。この他にも調査区全体から無数の柱穴状ビットが検出されており、中には中世の遺物や、底面で石を出土したものもみられました。



P-161 遺物出土状況

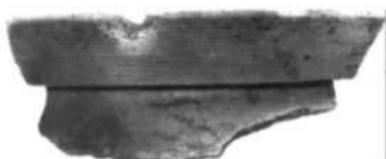


P-124 遺物出土状況

出土した遺物



1
甕



13

甕 (SI-10)



5

甕 (SI-17)



6

須恵器有蓋高杯の蓋(SI-17)

今回の調査で出土した遺物には、弥生時代前期末～古墳時代後期、奈良・平安時代および中世の土器が数多く出土しています。また、石鉢、石庵丁、砥石、石鎌などの石製品、ガラスおよび滑石製の小玉、舶玉製の管玉や玉未製品、有孔円板、鉄刀、鉄鎌等の鉄製品、鉛津、ふいご片、銅劍が出土しています。

堅穴住居跡S1-01～03では、肩部や底部、底面にまで叩きという製作技法を用いた土器（3・4）が少なくとも10個体以上出土しています。体部内面がハケ目調整で、在地の土器に比べ口縁部の立ち上がりが短いことなど、一緒に出土した（2）のような在地の土器とは異なる特徴をもつことから、搬入土器と考えられます。また、県内では4例目の製塙土器（8）がSK-19から出土しています。二次焼成を受けた跡が認められず通常みられる製塙土器に比べ調整も

丁寧ではば完形で出土したことなどから製塩には使用されなかつたものと思われます。この他に、S I -17では5世紀末の須恵器蓋杯（7）や有蓋高杯の蓋（6）が甕（5）をはじめ多くの土師器と一緒に出土しておりこの時期の良好な資料となりそうです。また県東部では出土例の少なかつた弥生時代前期の上器（1）が出土しており、今後の発掘調査でさらにまとまった資料の出土が期待されます。

鉄滓と考えられる（14）がS I -10で出土しています。大きさが14×11×3～4cm、重さ約350gを測ります。一緒に出土した土器から弥生時代後期後半のものと思われます。また遺構外からふいご羽口と思われる破片が出土しており、ともに注目される遺物です。

鉄製品としては、S I -17の埋土上層出土の鉄鏃をはじめ鉄刀や刀子、釘、その他不明鉄製品がみられます。



4 叩き目のある底部 (SI-01)



8 製塩土器 (SK-19)



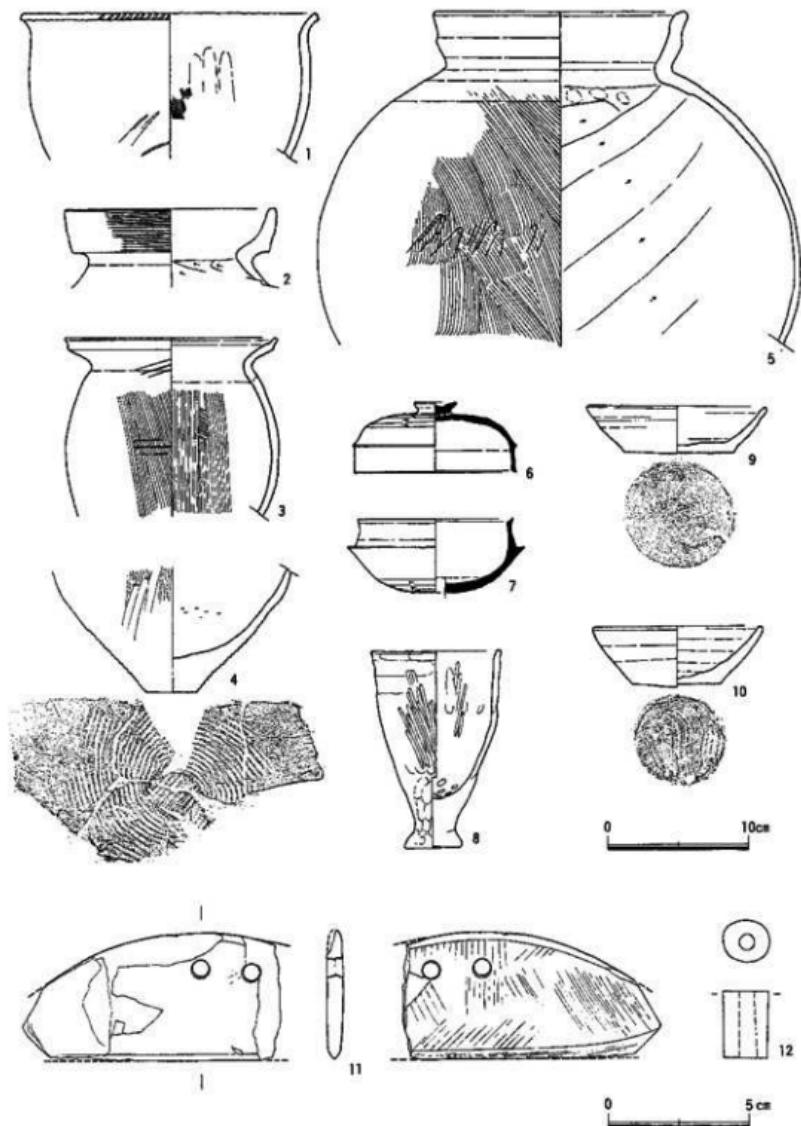
9

杯 (P-124)



14

鉄滓 (SI-10)



西大路土居遺跡出土遺物実測図

(2~4-SI-01, 5~7-SI-17
8-SK-19, 9-P-124, 10-SI-09)



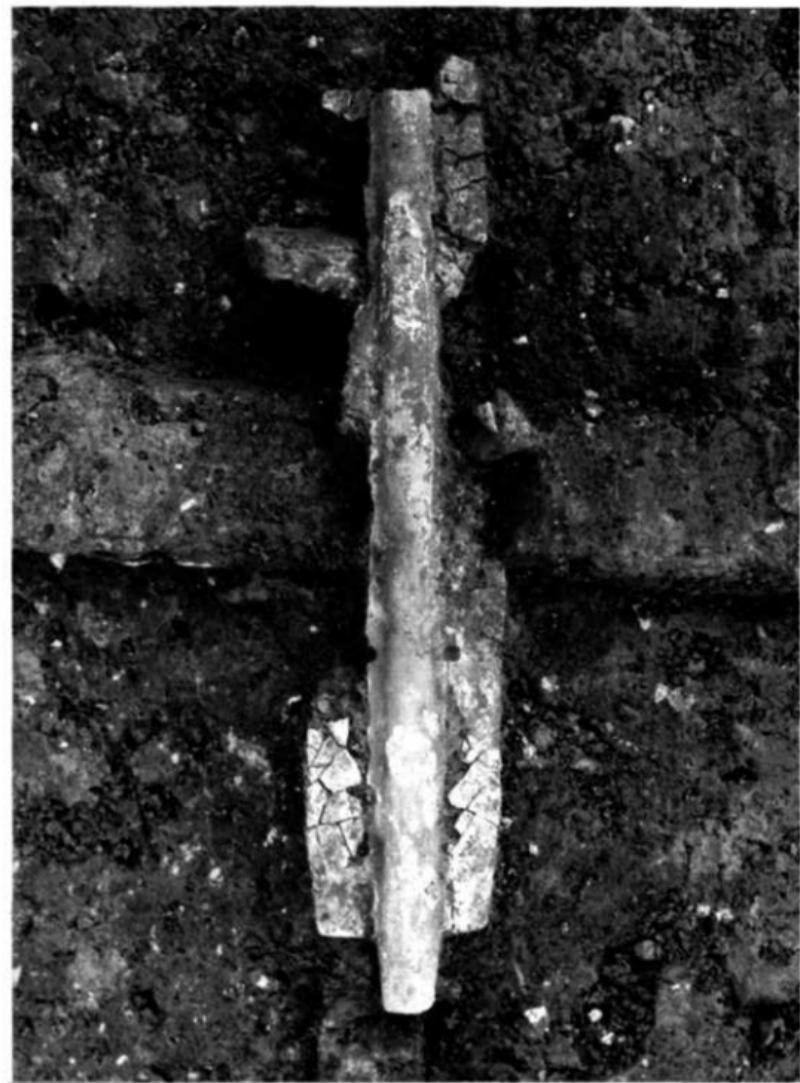
石製品

石製品としては、石斧、石鎌、石庖丁、砥石、凹石、石錐の他に、黒曜石削片が出土しています。磨製の石庖丁3点はいずれも破片または一部を欠損したもので、中には大型の石庖丁（下段中央）もみられます。稻穂を描む際に使用されたと思われる石庖丁（上段2点）は岡化した(11)のように刃のついた方が扁平で紐孔のついた方が弧を描きます。砥石は（下段右端）のように断面が凹状になるほど頻繁に使用され、住居跡から出土する例が多くみられました。

玉類として、ガラス製小玉、滑石製小玉、碧玉製の管玉、玉本製品が出土しています。このうちSD-08から出土した管玉（左端・12）は直径が1.6cm、長さが約2.4cmを測り、右隣の管玉2点と比べて大型です。また、対の小孔が穿孔された有孔円板の破片が2点出土しています。



玉類



西大路土居遺跡出土銅劍

銅劍

出土状況 調査区西側の標高7.47～7.49mの緩斜面で、ほぼ斜面に沿った傾斜で軸を直行させ剣先方向を斜面高位に向けて出土しました。剣先を欠いており、全体的に風化著しく刀のついた身自体も所々欠損、背も湾曲しているといった状態でした。銅劍の周囲2～3cmは銅劍からしみ出した成分で黒色に変色しており、変色した範囲からも銅劍がこの地点に落ち着いた時点で既に剣先を失っていたことがわかりました。トレーナーで断面の確認をしたところ銅劍に関連するような遺構の存在は認められませんでした。銅劍の出土した層位は、出土土器から時期的にもかなり新しいものと思われます。

銅劍 残存長は検出した状態で23.8cm、幅5cmを測ります。茎から9.2cm、闊の根元から7.2cm鋒先の部分に径4mmの穴孔があります。また、刃方は欠損しているため認められず、背に鎬の稜がはっきりと確認できました。また、背幅1.5cm～1.2cmに比べて身幅が広いところでも1.5cm程度と狭く、また厚さも1mmなく、極めて薄いものです。

鳥取県では東伯町田越で明治時代、農作業中に4本の銅劍が出土したと言われており、現存する2本は中継c類です。西大路上居遺跡の銅劍はこれま



銅劍出土状況（南西から）



銅劍（南西から）



銅劍（鎬部分）



写真撮影



実測作業



取り上げ作業（銅剣強化のため樹脂を塗る）

で中国・四国地方に広く分布する中細銅剣とは異なった要素をもっており今後の分析・検討が楽しみな資料です。

取り上げまでの様子

まず、土層観察のためのベルトを縦横に残し、土から銅剣全体を出す作業を注意深くヘラなどを用いて行いました。銅剣が発掘調査で出土することは珍しく、また銅剣は風化がすすみ脆弱となっているため、専門家の指導を受け、取り上げ作業を含め今後の調査の検討を行いました。

次に出土状況を記録するため、平面実測図を取り、写真撮影をしました。また、土層の観察から銅剣の縦横にトレーナーを入れ、銅剣が構造に伴うか否か、出土した層位の確認などを行い、断面図の実測、写真の撮影をしました。

そしていよいよ銅剣の取り上げ作業にとりかかりました。まず、銅剣にバラロイドNAD-10を塗りガーゼを上にかぶらせてさらに潤液をぬり、当日は小雨が降る湿った天候であったためドライヤーをあてて強制的に乾燥させました。乾いた後、銅剣の下層を含め周囲6～7cmに切れ目を入れて土ごと銅剣を取り上げました。後、銅剣を逆さにして下層の余分な土を取り除く作業を行いました。

現在、銅剣は保存処理を含め詳細な分析・検討が行われています。

まとめ

千代川右岸では南部の丘陵地に多数の古墳が密集し、丘陵から平地へつづく微高地にいくらかの集落が確認されていましたが、平野中央部や古墳時代中期～後期の集落の様相が明瞭でなく、小規模な遺物の散在地などから古代鳥取平野を大まかにとらえることしかできませんでした。しかし、平野中央部の独立丘陵である大路山の北西山裾部に立地し遺物散布地の一つでもあった西大路上居遺跡は、今回の調査によって鳥取平野の古代を考える上で大変重要な遺跡であることがわかり、多くの成果を得ることができました。

検出した遺構としては、竪穴住居21棟、掘立柱建物3棟、貯蔵穴1基、土坑57基、柱穴状のビット747、土器溜め状の土坑・土器群があります。調査区南側の大路山からつづく標高8～10m前後の斜面では、弥生時代後期・古墳時代中期末・奈良・平安時代の竪穴住居跡が切り合って検出され、調査区北側の標高5～6mの平坦地では古墳時代中期前半・中期末の土器溜め状土坑および土器群、古墳時代中期末～後期の竪穴住居跡および掘立柱建物跡・奈良・平安時代～中世のものと思われる柱穴が確認されたほか、調査全域から土坑、柱穴状のビットが多数検出されました。また、古墳時代前期の顕著な遺構は検出されていないものの、前期の土器が竪穴住居の埋土や調査区広域で多数出土しており、さらに高位の調査地南側の大路山山裾に遺構が埋蔵されている可能性があるものと思われます。また、弥生時代前期末～中期初頭の上器の出土などから、さらに下層にはこの時期の遺構の遺存が明らかになっており、弥生時代中期～後期にかけて空白の時期もみられるものの、弥生時代前期・弥生時代後期から古墳時代・奈良・平安時代・中世と、ほぼ継続的に集落の営まれた地域であったことが明らかとなりました。

出土した遺物としては、弥生時代前期末～中期初頭・弥生時代後期～古墳時代後期・奈良・平安時代・中世の土器、石斧、石歛、石庖丁、石鏃などの石製品、黒曜石剝片、有孔円板、ガラスや滑石製の小玉、碧玉管玉や玉木製品、鉄鎌などの鉄製品、鉄滓、ふいご片、銅劍があります。

このうち、平面多角形の竪穴住居SI-01とその下層の方形の竪穴住居跡SI-02を中心として叩き目の顕著な搬入とみられる弥生時代後期後半の土器が数多く出土しており、同時期の鉄滓がすぐ西側で出土していることなどを考え合わせ、これらの住居跡は何らかの特殊な性格付けをする必要があるものと思われます。また、銅劍は中国・四国地方に広く分布する中細形銅劍とは異なった要素をもつことなど、土器ばかりでなく他地域との交流を探る上でも今後の分析・検討に大きな期待がもたれます。

このように遺跡自体の検討はまだ始まったばかりであり、今後の遺物の整理がすすむにつれ、また発掘現場での下層の調査によってさらに興味深い調査結果が得られるものと考えられ、鳥取平野の古代を考える上で貴重な資料を提供してくれるものと思われます。

鳥取市文化財報告書 31

西大路土居遺跡発掘調査概要報告書

平成4年3月 印刷・発行

編集・発行 鳥取市教育委員会
鳥取市遺跡調査団
印刷所 日ノ丸印刷(株)
